

妖美エロチシズム

## 美体標本室の女

平 龍生

1

秋の陽射しはまだ強い。夏草の茂りもなお旺（さか）んであった。わずかに地面を風が撫でて行く。

今日は祖父の命日に当たる。

戸倉井雅彦は草地を分け、屋敷隅の地下室のある場所にと歩を進めた。手折られた金木犀の一枝が彼の手にはあった。甘酸っぱい芳香を放つこの花は祖父がもつとも好んだものだった。

地下室は、元々は防空壕として戦時中に掘られたものだった。

その後、祖父が人体臓器の標本室にするために改造、補強されたので内部は十坪余の広さを持っていた。錆びた南京錠を外し、鉄扉を開く。用心深く、また、きちんと閉めた。スイッチを押す。

いつとき、眩い外の光に切り込まれた闇だったが、いまは、四〇燭光の

薄暗さを棲まわせていた。この地下室に入ると彼は気持ちが落ち着く。もう一〇数年も、彼以外にはこの地下室には足を踏み入れていない。

整理が行き届いていた。

解剖学の権威であった祖父、精（くわし）は、戦時中から戦後二〇年ほど、天生堂大学病院で教授職に就き、教鞭をとった。

いまもって、変わり者教授の名があるくらいだから、往時の戸倉井精のエピソードにはこと欠かない。なにより、厳格であった。解剖実習で笑い声を立てただけで、医学の徒の道を閉ざされた者もあった。

死者に対する尊厳―そのことを、講義の度に老教授は口にしたのだった。

地下室の標本室は二段の棚になっている。

標本類は三〇種ほどもあった。

一本の金木犀の枝を雅彦は土器の花瓶に挿し込む。じめじめした空気の漂う地下室に馥郁（ふくいく）たる花の薫りが拡散した。

どこかに、ホルマリン臭がある。この匂いにはもう馴れていたから彼は苦にはならなかったが、はじめて足を踏み入れた者は、やはり、胸糞がなるような匂いを嗅ぐはずだった。

解剖学の分野でも、特に、祖父は、解剖標本と言われるものに心血を注いだ。この仕事は、戦時中からも続いていた。

乾燥標本とは、自然に各臓器から水分が失われ凝縮したもので、恣意的に乾燥のために手を加えたものではない。ホルマリン処理された各臓器の

軟部組織が、時日の経過とともに、固形乾燥体となったものである。

この地下室の標本棚には、肺臓組織、脳組織、肝臓・脾臓・脾臓などの各内臓部の乾燥標本が、いくつも、並べられていた。

どれもみんな、黄色がかって見える。ガラス製の容器におさめられていたが、それらは、明らかに年月の経過で変色していた。

祖父の思いは、本当は、生体に近い色とかたちを、後継の医学徒に遺すことにあつた。そのために、臓器標本の表面に、ペインティングがほどこされており、血管内に色素を注入し、生色を保つ工夫がなされていた。

終戦間もない頃からの標本造りだったから、医学界では、貴重な業績を印した人物だったとも言える。天生堂大学病院の標本室に、この祖父の手になる標本室の大部はおさめられていた。

だが、今は、埃をかぶつたまま打ち捨てられた状態に置かれていた。

一年に一度は、新入医学徒に開陳されることはあつたが、別に、誰も関心を向けるわけではない。確かなことは、時代遅れの分、これらは無用の標本ともなっていたのである。

天生堂大学病院解剖学教室の助手として、いつとき、雅彦も籍を置いていたことがあるので、標本類には、彼にもそれなりの思いが存した。たとえば、脳組織一つとっても、祖父の造った標本は乾燥し、縮小しているから、正確なサイズの標本にはなっていないなどの欠点があるのは彼も承知していた。

そんなことよりも、近頃は、合成樹脂による造型の技術が進歩して、精度の高い標本がつくられるようになっていた。脳組織でも何層もの水平断仕掛けで、内部の血管組織、神経組織まで、ちゃんと、見られるよう細工が施されていた。また、仕掛けとしては、層ごとに取り外し可能な標本仕様ともなっていた。

祖父の遺した乾燥標本は実物には違いないが、内部まで見ることは出来ない。表面だけを観察するだけの代物で、やや物足りなかったが、しかし、祖父の造った標本には愛着もあり、ともすれば、忘れ勝ちの一物になっていることに、雅彦としては義憤も感じていた。

何しろ、丹精を込めた標本類である。

祖父が他界したのは、雅彦が二十になったばかりの日のことであった。あれから二十余年が経っている。私立大学なので、祖父は七十四歳まで大学に籍を置いた。特に、晩年は傍流の仕事として、乾燥標本造りに精を出した。当時から、時代遅れの感もあつたのだが、祖父は承知の上、その殆どの日数を、この地下室での標本造りに費やした。

すでに雅彦も医学生で、祖父から直々に標本造りを伝授された。

軟部組織の血管洗浄、溶剤の注入、各組織部のペインティング―献体者の体の一部を、自宅の屋敷内に持ち込むことは違法だったが、祖父はそんなことには頓着はなかった。ちよつと、鬼気迫る日々の有り様だった。すでに、肝臓にがんがあることを承知していたので、終生のテーマにした病

変部の選択肢を自らに用意したふうもあるかに思われた。

水平断層造りの完成に残り少ない日々を捧げたのであった。

結局、死期を早めることになり、戸倉井教授は、半年後、この地下室で倒れ、病院に運ばれた四日後には、命を引き取った。

雅彦の父の宗一郎は養子として戸倉井家に入った。やはり、医学の道に在った。軍医として南方戦線に出陣、負傷を負い、終戦後故郷に帰って来たが、雅彦の二歳の時に、悪性腫瘍に罹り、数年の闘病後死没した。

それで、祖父が父親代わりとなった経緯があり、雅彦は祖父の人となりに影響を享けた人間となって育った。

金木犀の花の一枝を手にするのも、一つの思いにつながったことである。庭にあるのは、浅黄色の小さな花を寄せ合うウスギモクセイであったが、ある日、祖父は甘酸っぱい薫りの樹の下で、妙なことを言った。

「雅彦、日本で栽培された金木犀はな、みんな雄木なんだ。雄木と雌木があるのに、どういうわけか日本には雄木だけしかない。それで、花は咲かせるが実は結ばない。生殖の行為を自ら拒否しているのだよ」

なぜ、そんなことを言ったのかは分からない。独身で通した自分になぞらえての、それは独り言だったのかも知れない。

雅彦の母は、二十七歳で夫を亡くしていたが、雅彦の父親が死んだ後、いつも、祖父とは他人行儀のままだった。

そんな関係が続いた。

言葉使いから丁寧で、雅彦の眼にも祖父は間借り人のように映った。

食事をする時も、眼を逸らしたまま、それもそくさと済ませ、早々に席を立つことが多かった。

それに、大学の研究室で何日間も寝泊りをし、標本造りに勤（いそ）しんでいたりしたので、時々、雅彦の姉の三千子が下着などの身の回りの物を研究室に持って行った。自分の家と言うものを、結局を持つことなく、祖父は生涯を過ごしたことになる。

だが、ひっそりとしたこの地下室の薄暗さの中には、背を丸め、標本造りに熱中している祖父の姿が今もあるように思えた。

固く心房を閉ざした心臓、小さく凝縮した肺臓などの器官も、もはや、動きを止め、その機能を失っていたが、一つ一つは、まるで息をしているようだった。しーんとしていて、時折り、地下室の外空には秋風が吹き過ぎる気配が存した。もちろん、余程、耳を澄ましていないと聞えない。とくとくと鳴る心臓の鼓音が、急に大きくなる。

雅彦だけがこの場では生きていた。その薄暗闇の中で、雅彦は許婚の三嶋あかねの白い肉体のことを考えた。なぜだが、息をしていない…。

陶器の肌のようにすべすべしていて、とても冷たい。ふと、死に顔の美しさのみが思い浮かんだ。雅彦のみの特有の思いである。

「ああ、これは金木犀の薫りを嗅いだからだ」

誰にもわからない独り言をぼつんと呟いた。

金木犀は雄木で実を結ばないーあかねにも、このことを教えてやらねばと、その時、雅彦は考えた。妄想とやらが更に膨らんだ。

地下室の空気だけはいまも冷たかったー。

## 2

いつだって、三嶋あかねの方から連絡しなければ、雅彦との逢瀬（おうせ）は適わない。同じ天堂堂大学病院に、雅彦の母の悦子が入院していたので、雅彦と会う口実は、それなりの機会があった。

結局のところは、この日も、母を見舞った後、医局にいる雅彦に、あかねは呼び出された。

それでも、二人が会えるのは二度に一度のこと、雅彦は研究に忙しいと、すげなく、食事の誘いなども断った。医学標本を手掛けている叔父の紹介で、戸倉井雅彦と三嶋あかねと知り合った中で、もう一年余交際していた。やっと、この日、あかねは、雅彦と銀座のフランス料理店で会う約束が出来た。十日ぶりのことだった。

土曜日の午後、病院から、直ぐに家に帰り、わざわざにシャワーも浴び、雅彦もそれなりに髪も整え、身を繕（つくろ）った。

あかねの方は、身に着けるものを選ぶのに小一時間も要した。白地のカシミヤシャツのラグジュアリー、アダルト・テイストのワンピースで装っ

た。アクセントに、ビストロウシカの黒いベルトを着けた。

雅彦の色の好みは白を基調としたものに限られていて、その分、偏狭なところもあった。

どこかで、待ち合わせて、とりとめのないおしゃべりを、本当は楽しみたい。まだ、あかねは二十二歳になったばかりであった。

まるで、見合いの席で向かい合うように、午後六時過ぎ、シヤルダン、という名のフランス料理店の予約席で二人は顔を合わせた。

ムール貝の料理とバターライスの付け合わせ、白葡萄酒、テーブル上には淡いランプが灯されている。それなりの雰囲気もあったが、今夜も、快適なお喋りの方は期待出来そうになかった。

雅彦は寡黙な質だった。

時折り、氣遣って口元に笑みを浮かべることはあったが、一人、ワインの芳醇さを味わっているふうで、他人行儀の仕種が見て取れた。

いつもそうなのだが、結局は、場が持たなくなり、あかねがお喋りの役目を引き受ける。今夜は、あかねは自身のことばで、雅彦の気持ちを確かめてみたい気持ちもあった。

まずは、話の初めは身辺話から持ち出した。

同じ商事会社に勤める同僚の、変わった女の子の性癖、について、雅彦の医者としての判断なども尋ねてみたかった。

「ほら、いつか少しだけ話をした八瀉（やかた）圭子さんのこと」



「ああ、あの潔癖症の女（ひと）のこと？」

「職場での付き合いもたいへん、みんな気を遣うのよね」

八瀉圭子については、雅彦の知識情報量は、かなり、ある方だった。かなりの潔癖症で、特徴的なことは、男嫌い、そんなわけで会社ではみんなに敬遠されているという。

「ねえ、ああいう女（ひと）、どういうのかしら？女の人なら男の人を好きになるのは自然だし、男の人だって同じでしょ。異性に関心を示す、普通の人ならそうよね」

「ああ、自然だろうね。でも、愛のかたちも色々さ。精神的な愛を求めている人だっているだろうし、もっと言えば、自己愛の世界だけに耽溺する人だっているだろうしさ。どれも、人間としては自然なのだとは思うよ」

肉体愛について、雅彦はどのような考え方をしているのか、あかねは探りを入れて見た。少しく様子を窺う。

一年半もの付き合いになるのに、二人は手を握り合ったこともない。

まして、口づけなどもないまま、おおよそ、性に関心のある素振りさえ雅彦はあかねに示したことがなかった。

異性に関心を示す—この場合、あかねが口に行っていることは、かなり、淫らな想いをも、含んだ問い掛けのことばなのであった。

男と女は本能の赴くままに、お互いの体を求め合う、そのことに、何の進展もない婚約者同士の日々の過（こ）し方をあかねが奇異に思い、不安な気

持ちを抱いているのも、世間の習いとしては当たり前のことだった。

つまりは、女としての魅力に欠けているのだろうか、あかねは思い悩んでもいたのだった。

何のつもりか、このあと、雅彦は、きのうは祖父の命日で、金木犀の一枝を捧げた始末を告げたあと、金木犀は雄の木だけで、花は咲かせても実は実らせないの件（くだ）りを、あかねに言いつて聞かせた。

脈略があるようで、ないような、その話の中身については、それ以上のつながりの話とはならなかった。

ほんのりと、ワインのせいで、あかねの頬は火照っていた。どきんどきんと、胸内に、鼓音が伝わっていた。雅彦の腕を取り、少し甘えてみたい気分にもなっていたが、席を立った雅彦は、もう、気の早いことに出口レジの方向に向かっていった。あかねも席を立つ。

秋半ば、外に出ると、意外に寒かった。

このところ残暑に似た日も続いていたのに、この日は夜になると冷え、風も舞っていた。ポプラ並木の黄葉が寒そうに震えていた。

夜風だけが身に染みた。

あかねは雅彦とは半歩遅れて歩いていた。「今夜中に読んでおきたい論文がある」さつき、店を出た時に雅彦は口にしていった。

表通りに出ると、すぐにタクシーを止める。わざわざ、自分用のためだけに雅彦は個人タクシーを呼ぶ。はじめから、同乗する気などはない。

タクシーの行き先は雅彦の住む田園町なので、途次、渋谷経由だと、あかねとも一緒の時間を過ごせるのに、雅彦は単独行動を取った。

もう、別れる時の素気なさにあかねは慣れていたが、やっぱり哀しくな  
って、家に着くまで、あかねは半べそを掻いていた。

小さなマンションだが、上下階家族が住んでいた。

両親は一階で、あかねの居室は二階にあった。

帰り着き、一人きりだったが、着換えもせずにベッドの端に坐ると、ぼろぼろと涙を流した。お互い、まだ、心も打ち解けあっていない。

いつも、他人行儀のまま、会って別れるーそんな繰り返しであった。

「わたし、やっぱり、雅彦さんには嫌われているんだわ」とぽつんと呟く。

雅彦の母、悦子に対しても恨む思いを、いつとき持ったことがあった。

母一人子一人、初対面の時は強い視線で射すくめられた。

女の感情がもろ出しで、とっつけなかった。

もつとも、悦子自身はクモ膜下出血症の後遺症で寝たきりの身、そんな敵意は消え、あかねに対しても弱気となっていた。「雅彦のことをお願いますよ」とも、口にするようになった。いま、あかねが悩んでいるのは、雅彦との男女の間の問題で、雅彦の母親とのことなどどうでもよかった。

ふと、あかねは醒めた思いになった。

なにか、雅彦のために装った白いワンピースそのものも疎ましく思えて

来た。いや、激情を示せば、雅彦のために装った仮着を、誰かの手で引き裂いて欲しいものだとも思った。

醒めた顔の自分になった時、あかねは雅彦の、もの静かさ、に馴化（じゆんか）されている自分に強い嫌悪感も抱いた。

「引き裂くべきなんだわ……」

決意を込めた言葉が口から出た。

あかねは変身した女になろうと、一瞬のことと思い、着衣の胸元のボタンを引き千切り、布を裂いた。白い着衣が乱暴に捨てられたことの手順など覚えてはいない。姿見の鏡の前に、白い裸身を晒した女が一人立っていた。

あかねは男に、指一本触れられたことはない。

均斉の取れた裸身は処女の輝きそのものを、そこに指し示していた。

なにより、色が白いから気品が見て取れた。双つの乳房は下辺にふくらみが保たれていた。丸さだけの造型ではないから、乳首がつんと上を向いていた。細いウエストの割に、あかねの下半身は豊かな肉付きを持っていた。女らしい丸味が備わっている。

一筋、閉ざされたままの部分に、毛羽立ったような陰毛が飾り立てられており、その部分が目に写った時、あかねは恥ずかしさの余り両手で覆うようにしたが、その動作を止め、じっとその部分を見詰めた。

直毛質の硬さと密生した嫌らしさ、処女の女には相応しくない、それは飾り毛に思えた。「ああ、わたしの体ってどこか変なのよ。自己嫌悪の情を

露わにした。敵意を指し示す。

自分ではないもう一人の女が鏡の前に立っている―そう考えたかった。

なぜか、あかねは別の男の顔を思い泛(うか)べていた。

あかねは誰かに向けて、助けを求めている。

なんの躊躇いもなく、電話を手にしていった。

わたし、加倉井雅彦を裏切らなくちゃ。本気でそう思った。

今夜の成り行きを交え、上着を引き裂いたところまでは喋った。

唐突な思いであったが、この会話、伏線がなかったわけではない。

同じ会社の上司、村松敏和相手に、これまでも、何度か、雅彦との関係のことで相談を持ち掛けていた。歳は三十六歳、大人の男であった。

「男と女の事は俺が大先輩さ。大丈夫だよ。この俺だってあかねのこと気になっている。そうだな。あのさ。俺だってきれいなあかねを自分の者にしたいと思ったことありだよ」

危険な会話をさりげなく耳元に吹き込まれていた。妻子のある身だが、

村松には全身で受け取ってくれるような優しさがあった。

なにか、力が抜け、あかねは電話を切った。

鏡の前に立つ自分の裸身と対していた。黒々とし下腹部の一点には、すでに、淫らが沸いているかのようだった―。

十月も半ばになると、陽射しが急に弱くなった。地上を舞う黒い影も、命の儚（はかな）さを示しているかの如く、どこか頼りない。

戸倉井雅彦と八瀉圭子は新宿西の高層ビルの一角にあるホテルのカフェテラスに身を置いていた。今日の組み合わせは、意図して、八瀉圭子がセツトしたものだ。彼女の方から電話連絡をして、実現させた。もちろん、許婚者のあかねには知らされていない。

丁度、陽が翳っていて、舗道の街路樹が少し寒そうに中窓からは窺えた。地下の中二階なので、眼の上を人の脚が横切って行くのが見えた。その向かうの広い道路に沿って、半ば、葉を落とした青桐の並木が並んでいた。ちよつと、奇異な風景ではあった。

「わたし、大学病院の方には何度か行ったことがあつて、遠目ですけど先生にはお目にかかったことあります。それで先生とはこれで三度目、先生はまるで気が付いてはいらなかったでしょうけれど、わたし、あかねから先生のことは色々聞かされていて、それで、先生には興味があつて、前々からお会いしたいと思つていたんです」

今日の用件については、男と女の性<sup>せい</sup>について、お聞きしたいことがあると伝えた。

「わたし、もう、先生のこと、あのお、好きになっています」

「はあ、このぼくをですか…」

いきなりのことで、雅彦は口ごもった。

上体を屈めるようにし、圭子は身を固くして控えていた。膝の上に置かれた両の手指にも、ぎゅつと力が込められていた。

「この女の子はもはや死んでいるな。そんな直感で、雅彦はこの女を促えていた。

貧血症状を訴えていたので、顔色も悪く、なにか、体もだるそうに見えた。全体に、ほっそりとしていたので、未発達の少女にも見える。二十歳になったばかりの筈なのに、話し方だって、どこか稚ない。

「わたし、いま、本当に一人なのです。わたしが死を選んでもわたしのことを気にする人はいません。自分の方からそんな付き合いをして来ましたから。ほんとうの気持ちを言うと、先生、わたし、わたしを生んだ両親のことも許せないんです。嫌らしい体の触れあい方をした結果、こんな人間が生まれたんでしょう。わたし、生まれなくなかったんです」

今度は、澱（よど）みなく喋った。圭子はもこの場に来るまでに、この台詞を頭の中に用意していたのかも知れなかった。

十日ほど前に、圭子は商事会社の方も辞めていた。その間の事情を付け足しにし、殊更に話す。なにやら、身辺整理をして来たような事の成り行きだった。

両親とは死別していて、兄が一人いたが、報道カメラマンとして、海外赴任、危険地に派遣されたまま、行方不明の身となっていた。

血縁者なしの身であることが窺えた。

「わたしが失踪しても誰もわたしを探したりはしません。先生、この意味分かりますか？」

「いずれ人間は死にます。ぼくが言えるのはそれだけですよ」

「生かされている人間で、わたし、死ぬことだけが自由に思えるんです」

「そんなに思い詰めているんですか」

「そんなんじゃないんです。もっと、楽しい気分なんです、わたし。一つだけ、人間として生まれた証（あかし）に、心の愛を試してみたかったの。もう、わたし、先生を好きになっています。それでいいんです」

圭子の視線が、急に、一点に集まった。

じっと、雅彦の眼の内を覗き込んだ。

その時、隣席に中年男が一人で坐った。坐るなり、せせこましい動作で、背広のポケットから煙草を取り出し、火を点けた。

「あの、わたし、煙草の煙り、だめなんです」

はっきりとした口調で圭子が告げた。

男は、不機嫌な顔になったが、ガラス製の灰皿に煙草の火を押し付け揉み消した。初めて会った男と女なのに、雅彦は圭子のことか他人のような気がしなかった。妙な関心を抱いた。危険なもの思いでもあった。

「…圭子さんは精神愛の美しさに目覚めた女（ひと）なんだ。ぼくはその純粹さに惹かれているのかも知れない」



隣の男が、なにを青臭いことを言っているかと、鼻白んだふうに、ちらと、雅彦の顔を見遣った。その男に、呼び出しの声があり、男は席から離れた。

また、二人だけの世界が用意された。

「先生、わたし好きになった人に看取られて死にたい。会社を辞めたのも、その決意が出来たからなんです。一人では死ぬのは怖いけれど、先生がそばにいて下さるなら、わたし、明日にだって死ねます」

ちよつと、落ち着かぬふうに、雅彦は両手をガラステーブルの上に揃えて置いていた。この若い女の自殺体にわたしは関心がある。すでに、彼は圭子の生きた体を、死体の一つに置き換えて見ていたのだ。

「ほら、先生ってどこか女の人みたい。きれいな指って好き。男の人が嫌いなのはね。毛深いひとが多いからなの。生理的に、わたし、だめなんです。別にレズってるわけじゃないんですけれど、あかねのこと、同姓としては好きだったんです。でも、わたし、この前、あかねと二人で旅行に行った時、あかねのこと、大嫌いになったんです」

「……c。」

「あかねさんて、先生、とても毛深いんですよ。二人だけで入浴した時、まるで男の人みたいって思ったの。あの部分、とても嫌らしいんです」

露わな敵意を圭子が示して見せた。

どう答えればいいのか、頭の中で雅彦は言葉を探った。

戸惑いの気持ちも兆した。

「先生と、あかねとは結婚するんでしょう。それはいつの事ですか？」  
詰問調になった。少し、手指の爪も立てた。

そのあと、ふーと肩を落とした。気だるさの表情になり、あらぬ空間に視線を据えた。

「あかねって先生に抱かれたがっているんです。口づけしたこともないってほんとうですか？」

また、視線に光が戻り、敵意も示された。

「ああ、二人の間にはなにもない。ほんとうだよ。ぼくは時々、自分が性的不能者であればいいと思うことがある。あかねの体にも興味はない。はっきり言うておくよ。あかねとは結婚を果たす気もないし」

「よかったあ。ね、先生、わたし、死んだら、先生と結婚してあげるわ」  
一層に目を目張り、圭子は雅彦を見詰めた。下から掬い取るような視線を相手に向け、雅彦の反応ぶり、その様子を窺っていた。

が、その視線そのものは永続きはせず、やはり、圭子の視線は宙を泳いだ。自分の言辞に酔っているーそんなふうも窺えた。

4

解剖学教室でも、最近ではコンピューターが幅を利かせている。

医学部出身者よりも、理学系出の者の方がその数が多い。

各種の医療機器、病状診断のための機器など、いずれもコンピューターを操作する頭脳がなければ務まらないからだ。

戸倉井雅彦は助手の一人だったが、主に、人体解剖の分野に手を染めて来た。たとえば、よく知られているCT（コンピューターテッド・トモグラフィ）装置では脳の病変部を見るのにも、ちゃんと、内部を何層ものスライスにして、映像を示してくれる。

生きた人間の、生きたままの組織を内視出来るのだから、CT装置の威力はまさに画期的なものと言わざるを得ない。

だが、雅彦は地味な仕事だったが、死体相手の仕事を続けて来た。

学生相手の解剖実習が主であった。

どんな優れた標本が出来ようとも、それはあくまで造り物であった。

造物主の神様が与えてくれた人体という最高の機能を持った、生きた標本には、適うべき物はなかった。

「人体は最高の芸術だ。無駄なものがない。最高に機能し合った造型の美しさを持っている。加倉井雅彦の、それは至言とするものだった。

もつとも、解剖教室で、およそ、二ヶ月から、三か月掛けて解剖に付される献体者たちの肉体は、もはや、美しさなどは住まわせてはいない。

指先の神経組織から、骨髄膜の細部までも、ことごとく、メスは加えられるから、献体者は全身を切り刻まれることになる。

これは、「解体新書」に俟（ま）つまでもなく、医学徒の使命とするところ

ろだから、門外漢が眉を顰（ひそ）めるのは、単なる感情の問題でしかないと言ふことになるのだがー。

もちろん、雅彦は冷徹な目で死体たちの一つ一つの組織を見て来た。

一カ月も経てば、学生たちだって解剖台の横で、死臭なども気にすることなく、持参の弁当を開いたりする。

ホルマリンの異臭だって気にしてはない。

死体に触れたばかりの手で、女たちの肌にだって触れているのやも知れなかった。

解剖体は四人の学徒に対して一体の割り当てだったが、献体が不足しているのも、時折り、雅彦は教授の依頼もあって、献体者探しもした。

天生堂大学出身医に連絡を取り、引き取り手のない重態の患者を、死後回して貰えるように手配などもしていた。

この、ディスクワークの仕事中に、あかねの叔父の芳野から献体者希望者がいるとの報を受けた。当事者が詳しいことを知りたいと言っているのも、一度、当人に会ってやってくれと、芳野はその算段までも口にした。

実は、これまでに、二度ほど、他の用件で会いたい旨の連絡もあった。

あかねの意を含んでことかと雅彦は推察し、その申し出を断っていたが、献体者にことつけての誘いなら、無下に、断るわけにも行かなかった。

それで、赤坂にあるホテルの最上階ラウンジで、雅彦と吉野は会った。

献体者の話はそこそこに切り上げ、芳野はあかねとの結婚話について言

及した。

「どうでしょう。一度、仲人もお願いしたいから、半田教授に先生とあかねの祝宴のこと、正式に話をさせてくれませんか。わたしとしては、遅くとも、来春にはと考えているんですがね」

解剖学教室の主任教授の半田とは芳野はすでに面識があった。

医療用品などを扱う会社の経営者である芳野とは半田は昵懇(じっこん)の仲であり、また、樹脂包埋(ほうまい)標本という新方式の標本、樹脂標本などに埋め込む新しい医療品の開発者としても芳野は知られていた。

半田とは、研究仲間ともなる。

あかねとの仲だが、結婚前提で雅彦は付き合ってきたのだから、芳野の言い分には、それなりの理由というものが存した。

「ああ、もう少し時間をくれませんか」

「もう、一年半のお付き合いですし、あかねも来年は二十二歳になります。このところ、三嶋の家の方にもお出でにならないから、家の方も心配しておられますね」

「いや、お母さまがご病気の状態ですから」

「はあ、もちろん、その辺の事情は分かっているつもりですが、先日、お見舞いに伺った時、あかねのことよろしくお願しますと、改めて、お母様がおっしゃったものですから」

「ああ、そうですか」

雅彦は気のない返事をした。別のことを考えていた

三嶋あかねは自分にとつては、着せ替え人形のようなものだ、<sup>三</sup>と思った。上品な美しさとも静かき、ひっそりと、控えているだけの女で充分だった。<sup>三</sup>生きている人間は自由にならないから、嫌いだ…<sup>三</sup>何度か、あかねに対して発しそうになった文句である。

死人のような優しさと従順さが欲しいのに、<sup>三</sup>そんな言葉も重ねてみた。

だが、今現在のあかねの在り様にはそんな文句は通用はしない。どこかズレた話だった。まして、「性の儀式の執行者」のような顔をしてやって来た芳野なんぞお呼びではなかった。

たとえ結婚したとしても、<sup>三</sup>ぼくはあかねには指一本触れたりはしません。そう言うべきだったが、<sup>三</sup>ただ、曖昧（あいまい）な笑いだけを雅彦は口元に泛べた。

芳野の方も、妙な笑いで応じた。

あかねの母親からは、それなりに釘を刺されていた。

（あの人は女性の体に興味がないのよ。きっと。ほら、片親で、母親に育てられた男の人って、どこか、変なところがあったりするでしょ）

入院中のあかねの母悦子から聞き出した台詞である。

女に関心を見せぬ雅彦の素行は、<sup>三</sup>芳野も気に掛けていたことであつた。

「口添え役としては、あかねのことが気になって、こんな宙ぶらりんのまじや、いいわけありませんよ」

芳野は話を詰めようとしていた。気まずさで、二人の会話が途切れたので、芳野は言わずもがなのことを口にした。押しの手であった。

しばらく間が空いてから、やっと、雅彦が話の整理を付けようとした。「これ、ぼくとあかねさんの二人の問題です。しばらくは、このままにして置いて頂けませんか」

抑揚（よくよう）のない喋り口だった。感情が込められていない分、怒っているふうでもなかった。最上階のラウンジで二人は、向かい合ったままに、いつまでも、黙りこくっていた。

お互いの解決法が見出せぬままに、時間だけが無為に過ぎて行った！。

5

母の悦子の容態が急変し、雅彦は母を失った。

脳の血管の弱い箇所が破裂し死に至った。

芳野に会った翌々日のことだった。

姉の三千子が嫁ぎ先に夫を残したまま、ずっと、母のそばに付いてくれていた。それで、母の死期が近づいていたことは知っていたのに、雅彦は無関心を装った。

なんとなく、姉とも雅彦はわだかまりがあった。姉の三千子が十七歳の時、四つ下の雅彦は女性の体というものに興味を持った。

ある夏の蝉しぐれの降る午後のこと、女らしくなった少女は、しどけない感じで、風の吹き入る廊下際の畳部屋で昼寝をしていた。

姉はよく寝入っていて、その不用意な姿態を少年の眼が捉えた。半ば剥き出しになった白い腿と、白いショーツ、その下には何かが隠されている。一息を潜め、その時、少年は寝姿の姉の様子を少し離れた位置から窺った。軽い鼾（いびき）の声も聞いた。

生温かい勃起の感覚が半ズボンの奥に生じ立つのを感じた。生唾を飲んだ。つい、この間まで、無邪気に戯れていたのに、この頃は、少年は姉には子供扱いされていた。

髪に触れられることを嫌い、邪険に振る舞われたこともあった。

思春期というやつだー少年は祖父の書庫に入り込み、それらしい、性に関する医学資料なども、この時期、貪り読み始めた。姉の感情のぶれについて知ると共に、昂（たか）ぶったおのれの気持ちの在処なども探った。

もちろん、詳細に図面で記された女性器のページなども開き、いっぱしの、訳知り顔にもなった。少なくとも、この時までは、少年は性に目覚めた体験者の一人ではあったのだ。

自分の部屋に一旦戻り、少年は鋭い刃先を持つトレッキング鉞を手にした。夏の陽光が白く切り込む縁先に戻った。今度は、一匹の虫になり、そろそろと這って進み、姉の脚元で、それなりの位置を確保した。

なにかが隠されているー胸がどきどきした。



半分めくれたスカートをそそりと上にまくし上げた。まだ、寝息が漏れていた。これはちよつとした殺意だった。ピッキング鉋はU字型の握り部分があり、先だけが鋭く尖っていた。

二つの刃先がなにかを狙っている、そんな緊迫感があった。少年の眼は割れ目状に深く食い込んだ白いシヨーツの皺目に突き立っていた。

「これは解剖なんだ。姉さんはいま死んでいる。危ない想念が沸いた。

物事を論理立てて、少年の知能が働いていたのではない。対象者を一人見つけたという思いの方が強くあり、かなり衝動的な所作だとも言えた。そろりと少年の手が伸びた。

刃先が当たり、シヨーツの脇から刃先が潜った。トレッキング鉋が動く。微かに、布地が切断される音がした。

もう、蝉しぐれの音も遮断された。

メスを入られたシヨーツの布は、一部分が切断された。少年はそそりと布切れをめくった。息を呑む。もう、少女の女ではなく、ただ、黒い陰毛が張り付けられたように生え立っていた。

つい、この間までは、白くてすべすへした陶器肌の少女だったのだ。

いつの頃からだったか、少年と少女の、あの風呂場で戯れたあどけなさは失われていた。

「いやーっ、なんなのっ」

気付いた姉が上半身を擡（もた）げた。ピッキング鉋が、その場に投

げ出されていた。やはり、鋭い光を宿していた。

あれ以来、姉の眼の届かない範囲内で、少年は身を処した。

目立たぬ少年の役を演じながらに……。余り、眼も合わせなかった。

母も姉も同じ眼で、自分を見詰えているかのようで、異性に対して距離を置いた。

独り身が長かった祖父は、密かに、母を愛していたのだろうか、かつての祖父と母との関係について考えたこともあった。

身近な者に関心を寄せるのは人の常のようにも思えた。そうも慮（おも）んばか）った。姉を避けながら、それでも、少年は姉の存在を意識しながら思春期を過ごした。無視されている身なのだと思うと、逆に、憎しみの情も沸いたりした。矛盾していた。

葬列の時には、姉の三千子と肩を並べて、母を見送った。実のところ、雅彦は嫌だった。姉とは肩が触れぬよう、少し身構えた。

子供が二人いる姉は、性の関係、を結んだ女であることには違いない。

その相手の男も、姉の隣りに立っていた。

あらぬことに思いが走り、改めて、嫌悪感を抱いた。亭主の男の青々としたひげの剃り後までもが目に入っていた。

この母の葬儀には雅彦の婚約者の八嶋あかねは呼ばれなかった。正式に、戸倉井家として認めた訳でもないと言ったメッセージも込められていた。

代わりにやって来た芳野が、その分、礼を失つることになると、苦情

を呈した。可成りの文言も口にした。

葬儀の場では不謹慎と思われる内容も含んでいた。

「たった一つの救いは、あなたにあかねの肉体が、未だ汚されていない言うことだけですよ」

余程、腹に据えかねていたらしい。

黙って、雅彦は聞き流した。

他の誰かには知られぬよう、芳野は雅彦の耳元に吹き込んだ。

心を弄ばれたことの傷のことは、この男は余り口にしなかった。つまりは、肉体的な実害をあかねは蒙っていないということで、世間体な体裁は保てれるとも思っていたのかも知れない。そんな二人の関係だった。

6

「婚約解消たって、実際にはどうってことないさ。そのなんとか言う若手の解剖医、もしかしたら生きた人間より、死体の方がお気に入り召しているのやも知れん。あかね、そんな男のこと、きっぱり忘れろ」

「もう、忘れてるわ。いや、忘れたいの。わたし、会社では。物笑いの種になっているみたい。八潟さんのように、きっぱり会社を辞めるつもりよ」

スカイラウンジの上階のレストランから、階下の夜の街を、会社の上司、

村松とあかねの二人は眺めやっていた。

一時間掛けてゆっくり、夜景地を巡る仕掛けが、この最上階には仕掛けてある。それなりのムードがあった。あかねと村松はきらきら煌（きら）めく、眼下の街を居ながらにして、何周かした。

カクテル・グラスには、ホワイト・ラムにレモンジュースの入ったダイキリ・カクテルが充たされていた。

「わたし、今夜、村松さんにみんな上げる。素直な気持じゃないのよ。わたしを一年半も無視し続けたあの男に復讐してやりたいの」

「おいおい、男と女が抱き合う関係って、そんな悲惨なものじゃないよ。やさしい男の腕に中で女になるってことは、もっと、美しい行為でなければさ。いや、美しさそのもの、あかねの女として生まれて来た歓びを、一つになって分かち合う。何より、美しいことさ」

「ほんとうに、わたし、美しく変身出来る？」

「そんな荒んだ気持じゃためだな。どうだろう？今夜はカクテルを飲んで、ほんのりと酔って、いい気分になったところで、二人はお別れってことにしてもいいんだよ」

本気ではないのだが、あかねには男の本心は見抜けず、たじろぎの様を見せた。

「だめよ！わたしの寂しさを救ってくれる人が欲しいのよ。わたし…」

「誰でもいいんだって言うのなら、わたしはあかねを抱いたりしないよ。」

あかねだって、好きな人に処女は捧げたいんだろう」

「好きよ。わたし、村松さんのこと、やさしく導いて欲しいの。だから、そんな意地悪なことを言わないで」

「ううむ。それなら、わたしの気持ちもあかねに預けようか」

そう言いながら、村松はあかねの膝の上に、手をかぶせた。女の体のことを知り尽くしている男の仕種（しぐさ）だった。

「いいかい。初めての女性には、ただ一度だけの機会だよ。処女喪失と言うのはさ。あかねはね。明るい光の下でみんな男に見せなきゃだめだ。きれいなままのその部分をね。わたしが女にした後は、もう別の女になっている。その部分は人工的にだ。強引な力と言うべきかな。形状が変えられてしまう。だから…処女のままのきれいなかたちを、わたしが、この瞼の裡（うち）に焼き付けておく。あかねはわたしに見られるんだよ。それもじーとだ。それこそ隅の隅まで、奥の奥までもだ」

「あのお、そんなにですか、そんなに…」

瞼を伏せたまま、両手を握りしめる。あかねの手がぶるぶると震えている。村松の念押しという言葉には既にして、生々しさがあった。

「さあ、もうその時間がやって来た。歓びのベッドルームへ、エスコートさせてもらうよ」

腕を取られたままに、あかねは席を立った。

よろよろした。腰のあたりがもはやに痺れていた。

村松にそのまま体を預けた。一步、二歩、歩き出した時、あかねは濡れたぬるみの感じが、股間に生じ立っているのを感じた。

期待感に胸がときめいた。村松の魔の囁き声に、もう、すでにして犯されていた。そのあたたかみの潤みは、その部分に、女性器そのものが、そこに在ることを指し示していた。

これらのあかねの心の動きだが、この一連の所作には、それなりの前段階があつた。昨夜、あかねが村松に電話した時、すでにして、村松は心穏やかならぬ文句を、あかねの耳元に囁き掛けていたのだった。

初体験をする女の心得なんでも、村松は巧みに言葉を操り、あかねをその気にさせた。

「…あかねが好きだよ。ずっと前からだ。明日の夜には、あかねはもう大人の女になっている。初夜つてことにして上げよう。そうだ。いいことを教えておこう。もう、あかねはわたしの手の内にあるつてことさ。今夜があかねにとっては、処女の身としては最後になる。そこでだ。あかねはね。そのきれいな女の部分にお別れを告げておくといい。自分でよく見っておきなさい。処女膜のあるところ、破瓜と言うように、突き立てられると破れて、形を変える。そうだな。そうやって自分のそこを見ながら、そのところをどうやってわたしに見せるか、そんな工夫もしてみるといい。それだけで、そこが蠢(うごめ)く。そうだ。わたしもつぶさに観察するのを愉しみにしているよ。ああ、それから…」

まるで、宿題を課されたようだった。色々と、その後も、村松は卑猥な文句を列ねたのだが、あかねはよくは覚えていない。

昨夜も一枚鏡の前に立ち、あかねは素裸になった。

居ても立つてもいられなくなった。

あの、淫らさを表した一筋の黒い筋目が、下半身のすばまった箇所にあるのが、初めに目に入った。なぜだか、股間を開けなかった。

「淫らな女、いいんじゃない。そんなことお。いい、あかね、わたし明日にはもう一端（いっぱし）の女になっているのよ。そう、大人の女、それだけのことじゃない」

強気なことを口に出しているのに、あかねは泣き顔になっていた。

あかねは自分の両頬を、平手ではばんばんと張った。

「あかね、しつかりなさい。もう、取り澄ました女なんて大嫌い！わたし、お金で買いに来た男にだって処女膜破られたいのよ。それぐらい強い気持ち、わたし、その気よ。ほら、わたしの体、こんなにきれい。男なら放つておかないわ」

戸倉井雅彦からは、これまでの交際はなかったこととして欲しい旨の最後通牒を、叔父の芳野の口からは聞かされていた。

もう、呪縛からは解き放たれていた。

村松から、そそのき掛けられたことに気付き、おぞおぞと股間の奥に手指をやり割れ目をそそーと開いた。ただ、見詰めていた。

「処女膜の在処（ありか）？そんなのお…なにもかも、村松さんに任せればいいのかわ」

鮮紅色の濡れ光った皮膚を目に止めただけだった。さすがに、それ以上のことは果たせなかった。ベッドに入ってから寝付けずに過ごした。

自慰すらしたことはない。その部分に手指を差し伸べるなど、とても出来はしない。やはり、体の内から生じ立って来るぬめりの感じだけは、どうしようもなく、あかねは少しく股間を擦り合わせただけだった。

その昨夜と同じぬるみの生じた股間が、いまも、秘（ひ）そみの奥所には用意されていた。あかねの歩みが危ういものとなった。

移動するために乗ったエレベーターの上昇気配の動きに、ふわーと体が浮いた。予約しておいた部屋に入った時、肩を引き寄せるようにしながら、村松が告げた。

「わたしのすることはすべて大人の行為だよ。わたしに任せればいい。初めての時、痛いつて言うのは、あれは、ほとんどは男の責任さ。わたしの言う通りになんでも言うことを聞くね。それがどんなに恥ずかしいことでもだ。わたしは、導くのもうまいから、私の言うとおりにすれば、痛くなんかないさ。ああ、そうだ。昨夜は、あかねはあかねの処女膜にもさよならしておいたか。よく、自分でその神秘的箇所を観察したのかな」

「…いえ、わたし、そんなの」

「それならわたしが教えよう。なにもかもをだ」



心得たふうに村松が言った。

肩をすぼめるようにし、あかねは、小さく小さく頷いた。

おのれの手指に力が入っていた。

性のエスコート役を演じながら、あくまでも中年男は紳士面をして見せたが、その実、舌舐めずりをしていた。強圧的な言辞も弄した。

「あかねは幸せさ。若い男なんて、ただの挿入具しか持ち合わせていない。いや、自分の欲望を捨てるためにだけに稚拙で、しかも暴力的な力を使用する。セックスの素晴らしさを知るには初めが大切なんだ。苦痛ばかりでセックス嫌いになった女はたくさんいる。あかね、あかねはこれからわたしに導かれて女になる。やさしくさ。いいね。さあ、これから二人だけの濃密な時間を持つことにしよう」

7

眩い蛍光色の光が枕元にはあった。

何もかもが焙り出されているかのような、そんな舞台設定がここには用意されていた。段取りの通りなら、男と女はシャワーを浴びるはずなのに、村松はその行為を止どめた。

「そのままでもいいさ。股間のその奥の奥、美しいところがさ。嫌な臭いを放つわけがない。そうだろう。芳香さ。むしろ、自然のままのあかねの方

がいい。恥垢の匂いのある女。それとて奥床さの薫りだよ」

あかねは、ただ、従うしかなかった。

もう一つ、村松は注文を付けた。

「ひとつずつ、一枚ずつだ。着ているものを剥がして行くつて趣向はどうだ。やってごらんよ。自分の美しき、そう、大人の言い方をすればエロチシズムの表現でことになるのかな。男の眼を愉しませる、そういう術（て）もありだ」

「わたし、そんなの恥ずかしい」

「いいねえ。恥ずかしいからさ。男と女の仲は素晴らしいんだよ」

優しく微笑みかけ、村松は顎を上下にするようにしてから、その行為をあかねに促した。恥ずかしい：言葉にはしてはいなかったが、あかねの仕種、その一挙手一投足には、恥じらいの気持ちが表されていた。

上着を脱ぐ。村松が受け取った。

やがて、下着だけの姿になった。

村松はあかねに対峙し、その举措（きよそ）を窺った。もう、観察者の眼になった。あかねは村松の顔など見遣っている余裕などなかった。

さすがに、スリップの肩紐を外そうとした時は、躊躇（ためら）った。身を固くした。

（わたし、自室の姿見の鏡の前で、やはり、こんな恥ずかしいポーズを取ったことがあるわ。あの一部始終を、まるで、この人は見ていたみたい。

わたしのこと、この人に掛かったらみんな見透しなのかしら。そうよ。わたし、この人に操られて何もかも…)

そう、思ったら、少し大胆になった。それでも、すーっと、スリップを足元に落とした時、思わず、両の腿を閉めていた。

それでも、ブラジャー一つ、ショーツ一つになった女は、じっと、男の顔を見遣った。どこか、切実な訴えを持った眼差しだった。

「そのまま、素っ裸になるかい？自分の美しさに酔ってナルシストになるなら、立ったままの方が、女のかたちは美しく見せられるよ」

小さくあかねが頷く。ブラジャーの留め金を外す。そのままにすんと落とそうとした。

「あ…ゆつくりだ。焦らすように、ゆつくりだよ。そういうのがいい」  
操られたままの役をあかねは演じた。

何か、すべてを見せるのが惜しいような気にさせられた。

そそーと、手指が動き、乳房のふくらみを半分ほども露わにさせた。

両の乳房がもろ出しになろうとした時、「とてもきれいだな。色が白くて」と、村松が賛辞の言葉を重ねた。

「もう、見ているだけでは我慢が出来ないよ」

と、今度は、強い文句を浴びせると、村松は自ら手を伸べ、ぐいっと、ブラジャーを一気に外した。「あっ」と、あかねは声を発したが、抗（あがな）うでもなかった。ぽろりと、双乳（もろち）がこぼれ出た。

両手で隠そうとしたのを村松が外したので、乳房のかたちが、はっきりと見て取れた。たつぷりと、その肢体を視線で舐めつくしてから、次の行動を村松が指示してみせた。

「どうする？ 処女膜の形状とやら、ご見参の番ってことになりそうだな。立ったまま見せるかい。それとも、寝転がって、大股開脚と行くかい。それもなかなかいいものだぞ」

嫌らしいもの言いだった。

そんな事柄をあかね自身が決められるわけはなかった。戸惑っていると村松が、性のエスコート役<sup>セックスガード</sup>を素早くこなした。

両手を差し出し、あかねの上体を抱え上げると、ベッドの上に運び込んだ。何もかもが、手慣れたふうで、ベッドに仰向けに寝かされた時、もう、あかねには身を任せる心の準備が出来ていた。唇を噛み締めた。

「最後の最後だね。わたしが白いショーツは剥がして上げるよ。わたしも愉しんでみよう」

村松の手がショーツの端に掛かった時、あかねの全身がぶるぶると震え始めた。知らず知らずの内に、両腿を閉めるようにしていた。村松の手がさらに割って入り、そろりそろりと、ショーツをずらしに掛かった。もはや、陰毛がはみ出て来た。その毛並みは生きているように、こぼれ出た。

「いいじゃないか。下半身そのものも、楚々たる風情もおおいに有りだ。わたしにはそう見える。それなのに、下の毛だけは、不似合いげに、猛々

しく生え揃っている。少し嫌らしいか。でも、こう言うのもいいねえ」

なおも、言葉の遊びは続いた。

やっと、あかねの股間が晒(さら)された時、もう、心ならずもあかねの肉壁(ぬれひだ)は濡れ光っていた。またも、淫靡な言葉が重なる。

「こんなのを世間では処女の汗って言うんだよ。ぬらぬらの濡れ汁さ。自ずからに光っていて、こういうのって、その女の子の、性の感性、なんぞも見て取れるんだ。あかねは感度抜群女になれるかもな。その点ではおおあり話、いい大人の女になれる可能性大だぞ。さあ、濡れの本体、濡れの穴をとつぷりと見せて貰おう」

膝頭に手が割って入った。股間が開かれた。それでも、身を固くしていたので、村松は力を加えた。口の中であかねは呪文のようなものを唱えていた。そうしてないと、恥ずかしさに耐えられなかった。

「あ…いや、いや…」

少し首も振った。

「自分の指で、あかね、開いてごらんよ。男が指を添えると、女の子によつては痛がつて逃げる者もありだ。ほんとうに処女膜の形状を初めての男に記憶して欲しいと思うなら、自分で開いて見せるのがいちばんいい。さあ、臆せず、やっどごらんよ」

もう、あかねは追い込まれていた。逃げようはない。

下半身に両手を伸ばした。それからの有り様は、順序を追って、まるで

実況そのものに、村松の言葉で綴られた。

「肉の割れ目に、ここが男性器の入り口ですよと言うように、小さな導きの穴が開いている。まだ、処女膜付きだから、すぼまったままだな。そう、もつと開いてみるよ。そうだ。そうだ。ああ、はっきりと見えた。あかねの処女膜はかなり珍しい分類に入る双つ穴状処女膜ってやつのようなのだな。ひだ粘膜の真ん中に糸目のような筋目があるのでよく分かる。その左右の両側にそれぞれに小さな開き穴がありさ。つまり、双つ穴ってわけだ」

形状云々については、医者でもない限り仔細を判断するのは難しいもので、村松は知ったかぶりの口を利いただけのことだった。

「挿入すれば、間違いなく双つ穴はふつんと切れて一つ穴になる。こいつは愉しみだな。あかねのは、その何だ。最上等の構造の可能性もありだな。いいぞ。いいぞ、これは…」

その間の、観察行の成り行きに、あかねは一々感応していたのではなかった。中年男の言辞に弄ばれていただけだった。

「もつとだ。もつとだ…」

そんな催促の仕方に連れて、露出症女に仕立て上げられていた。

口づけもして、乳房にも触れて、それなのに、あかねの女体は露わな変化を見せ始めていた。あかねは唇を舐めた。そうして唇を湿さなといわれなかった。乳首も勃（た）ち、ことあるごとに、体がぶるぶると震えた。もう、すべてが上の空だった。

心憎い技の虜にされていた。

心得て、村松も際どい台詞を、何回か口にして見せた。

「…乳首も、つんと上を見て、乳暈（ちちかさ）までもが粒目を露わにしてきた。それだけじゃない。黒い陰毛がげげしく、みんな上方に向けて立ち、そそげ立っている。ちよつとした、これは見もの、壮観だな…」

（もう…わたしを女にして下さい。わたしの願いはそれだけなんですから。もう、これ以上、わたしもあそばさないでください…）

そんな過激な文句だけを、いまは呪文のようにあかねは唱え続けていた。「すべて前技なしだ。いきなりの挿入といこうか。こういうのも一段と女としては記憶に残るものなのさ。わたしにはわたしなりの流儀ってものがある。いきなりの強烈体験だ。いきなりに、ずぶっと入れられるってのは凄いいことなんだぞ。これは…セックス本番、当たり前じゃつまらない。そう、前技というのも。すべてが終わった後に、余韻を愉しませるためにとっておくことにしよう」

どこまでも憎い身のこなしだった。

「さあ、その気になるんだ。処女膜破爪の段取りになった。わたしがあかねの処女膜は破って上げるよ。このでかい肉棒が初めての穴に入り込む。

あかね、見凝（つ）めてごらん」

やっと、首を擡（もた）げるようにしてあかねは足元を窺った。狙っている一物が、すでに、そこには据えられていた。

「だ、だめ…」

意味を為していなかった。頭の中で考えていることと、反対の文句をあかねは口にしていた。両手が空を掴むように泳いだ。

「ゆっくり、そして力強くだ。入るぞ。奥の奥まで、こんなにでっかいのが入ってゆく…」

「ううっ、うわわっ…」

首を上方に上げ、喘いだ。股間を閉じるようにしたのに、振られる力で股間は分けられていた。無体な力が作用していた。

この行為が、どれほどの長さ続けられたのかさえ定めが付かなかった。

それほどに、未知の体験は、とてつもなく、強烈だった。

どこか痛い。ひりひりもする。それなのに、別の快感が下半身から沸き立ち、そんな違和感のすべてがもう掻き消されていた。

どれほどの喘ぎの声を発したのか、歓びに身を悶えたのか、ほとんど何も、あかねは覚えていなかった。村松が呻いて射精した。

その時、肉棒の先が、ぴっくんぴっくん息をした。

ぬーと肉棒を抜かれた時、生暖かい体液が肉の割れ目を這った。

ふわーと、体から力が抜けて行き、あかねは充足感に酔った。

（わたし女になったんだ。この人好き。わたし、村松さんのこと好きよ）

やはり、呪文のように唱えた。

「ああ、わたしが通してやった膣穴がぼっかりと口開けているよ。双つ穴



の糸目がぷつんと切れて、うつすらと処女血を浮かべている。よかったな。あかね、あかねの女体は開発されて、もともともと、生き生きとした女の体になって行くだろうよ。このわたしが指南役だ。わたしに任せておけ。あんな死体にしか興味のない不能男と別れられてよかったな」

戸倉井雅彦のことが村松敏和の口から出たが、もはや、あかねは元婚約者のことは忘れていた。もう、気にはしていなかった。

前技を後回しにした村松が、口づけをし、そして、乳首を含み、吸った。すすーと、手指が優しく肌を撫でた。その余韻の中で、とても幸せな時間が過ぎた。両手を差し出してあかねは村松を胸内に引き寄せた。

一体感を味わった。裸と裸の体が隙間もないように密着し合っていたー。

8

旬日の日が過ぎた。

その後、三嶋あかねと村松敏和は何度かの逢瀬を重ねた。男と女の仲は深まり、あかねは、性の快樂<sup>レキョク</sup>の意味を、更々に知った。

そんな或日、八瀨圭子から一通の手紙が、あかね宛てに届いた。

圭子が会社を辞めて以来、二人は会っていなかった。

几帳面さを思わせる小さな文字が文面には綴られていた。

『いま、わたしは素晴らしい精神愛の世界に身を置いています。永遠な世

界です。

大人の女になんか成りたくはありません。もう、この世にさよならする時が来ました。そう、わたしは身も心もきれいなままな女なのです。少女のように、ただ一つだけの夢を見続けていたのです。

わたしの身と心の中に、いま、好きな人が住み着いています。わたしの純粋な身と心だけをあの人は愛してくれました。

わたしに死ぬことの素晴らしさを教えてくれたのはあの人です。Tさん…女性のようなくれいな指をした、やさしそうに見えるあの人…わたしはTさんの心の中に、ずっとずっと生き続けます。終わりはないのです。

どうか、探さないで下さい。でも、わたしが死の美しさに殉じること、あかねさんだけには知っておいて欲しいのです。なぜって？わたしはあの人に愛されているからです…』

事の仔細は、あかねは知る由もなかった。あかねの知らないところで、事態だけが推移して行った。一通の手紙だけが残された。

秋の深まった或る日のことだった。

一台のライトバンが甲州街道を経て、中央高速道に入った。車の助手席で八瀧圭子は静かな笑みを浮かべていた。死の途に就く…心の安らぎが表情には表れていた。死の案内人になったのは、戸倉井雅彦であった。

無言でハンドルを握っていた。

あれから、二人は二度会った。男と女というよりは兄と妹のようにも見

えた。二人はそのように振る舞った。

他人同士、それなのに、お互い、他人のようには見えなかった。

助手席に乗っている女は、もはや、死体そのもので余計な口を利かない。

半分ほど窓が開かれていた。かなり、風は冷たい。

フロントガラスの向こうの空も、灰色の雲が覆いかぶさっていて、どこか、重苦しく見えた。行く手が遮られていた。

それでも、これまでの「生」をなぞるように、憑かれたように、圭子が独り語りを始めた。

聞くでもなく、雅彦は耳を傾け、時折りは、頷きを返した。

「…ああ、このまま、わたし眠って、明日の朝は目覚めなければいいのに。いつも、わたし、そんなことを考えていたの」

死人のお喋りの初めの文句だった。

抑揚のない喋り口で淡々と言葉を列ねた。

「…わたしの死の儀式って、夢を見るように、お願いしたいの。わたしが夢見た心の夢、わたしに心の愛を下さい。心の愛をお創りになった愛の神様の御許（みもと）に参ります。ああ、一つだけ…わたし、先生にだけは言い遺しておきたいことがありました。わたし、四つの時、父と母の、あの嫌らしい場面を見てしまったのです。毛深い父の手と、母親の黒いだけの性器のほぞ間、なんて汚ならわしい。人間て嫌い。特に、前にも話はしたけれど、あかねって女の子の、あそこの毛深さも…」

ただ、雅彦は三車線の白い流れを見ていた。白いラインが身をくねらせ  
て、彼の車を襲い、瞬時に、後方にと流れて行く。

河口湖インターから富士の裾野に向かう国道にと車は入った。細い、曲  
がりの道をくねくねと辿る。西湖に至るルートであった。

あと、十分も走れば、知っている茶店に着くはずだった。以前に、青木  
ヶ原樹林の自殺者捜索行に加わったことのある雅彦には、勝手知ったる地  
でもあった。その時の本部として茶店は設定されていたのだった。

拾い集められた骨格だけの男女別の遺骨類―年齢などを識別するために、  
法医学者の医師の指示に従い、作業を手伝った。身元不明者のものを大学  
で預かり、遺体骨を骨格標本を作るための協力も申し出てあった。

西湖に沿って三十分ほど走った。

途中で、青木ヶ原樹海方向に車首を変えた。

原始林を形成している丸尾のあたりには、いつくもの風穴があった。火  
山爆発の時に、充満したガスが抜け出て、そのあとに奇妙なかたちをした  
風穴が残された。知られているものだけでも、鳴沢風穴、富岳風穴、精進  
風穴、竜宮風穴などが、このあたりにはある。

さらに、大室山の裾野を下れば、さらに、数多くの風穴が点在した。

深い洞窟群の内部に入れば、氷点下の冷気が保たれている。

戸倉井雅彦は八瀉圭子に約束した。氷穴の一つに、彼女の美しい肉体を  
永久に保存してやると…。処女の美しさを持したままで、八瀉圭子は永遠

(とわ)の眠りに就くはずだった。

ライトバンは、樹海の入り口から少し離れた場所に停められた。

まだ、生き残っていたのか、もう、季節が外れようと言うのに、秋蜻蛉(とんぼ)が、草葉を分けて行く二人の先で泳いだ。

ひんやりとした冷気がある。樹葉も秋色(しゅうしょく)を深くしていた。火山岩の上に根を張った樹々だから、大体がひよろりとした樹が多い。行く手に、光の領域はなかった。

それで、まだ、昼間のことなのにあたりの樹林には薄暗さが棲み付いていた。二人は黙ったまま歩いた。

腐葉(わくらば)の上を踏みつけながらの一步、一步なので、どこか足取りは危うい。死者を迎える樹海は、どこまで行っても同じ表情をしている。一度、足を踏み入れた者は、目印がないので道に迷い、再び、元来た道には戻れないという云い伝えがある。

戸倉井雅彦には別の地の利があった。

前に一度、樹海に踏み入った時の経験があった。

地表に張り出した根瘤(こんりゅう)を見つけた。黝(あおぐろ)い光を帯びた苔類が、それらの根株にはびっしりと張り付いていた。

その光の下の、段落のある場所に、人が一人入れるほどの抉られた穴があった。苔むした玄武岩が岩根のひさしの代わりをしている。

春と秋、死体狩りを、毎年、地元の警察と消防団が実施する。ここは、

まだ樹海の入り口に近い場所だったが、大抵（たいてい）自殺体がある。すでに、何体もの男や女たちが自ら生命を絶った場所でもあった。

戸倉井雅彦は八瀉圭子を、この死者の棲み穴に導いた。二人分の身を横たえ、寄り添える空間がここには用意されていた。

無言のまま、彼は圭子にこの場所を指し示した。

かさこそと、樹葉の葉擦れの音だけがした。

「先生、わたし：あかねさんから先生を奪ったのでしょうか？」

「ああ、そのようだ：」

「眠りに就く最後の最後まで、わたし、先生のことを考えています」

白いワンピースに身を包んだ圭子は、すでに、死に装束に身を固めているかに思われた。

睡眠薬の錠剤を手にすると、静かな笑みを浮かべたまま、圭子は死の薬を胃の腑（ふ）に落とし込んだ。

多すぎても、少な過ぎてもいけない。適量を雅彦が配合した。

黒い土の上に、直（じ）かに、圭子は仰向けに寝た。死に装束の背は一部汚れたが、晒されたままの圭子の素足はきれいだった。

ほぼ真つ暗闇の氷穴の底で死ぬのには怖ろしさもあるので、勇気が求められた。それでも、介添え人が居てくれるお陰で事は運んだ。

生きている間は、樹葉のさやぎの音に耳を傾け、そして、愛した男の気配を身近に感じながら、圭子は眠るように死にたかった。

「睡眠薬を飲むと、一時的に、とっても、楽しい気分になれるって、ほんとう？」

迷いのない甘えた口調で、圭子が問うでもなく口を開いた。

「ああ、圭子さんも楽しいお喋りをするといい」

「洞窟の底にきれいな水が湧いて出ている湖があればいいな…誰も泳いだことがないの。どこから光が漏れていてね。白い砂底の透けて見える、その地底湖の水の中を、わたしは、いついつまでも、独りで泳いでいるの…もちろん、先生に見守られながらよ。いいえ、独りでも大丈夫よ。そばに居て下さらなくとも。大事に大事に、わたしの心の中にしまっておく先生だもの、いつだって、わたしのそばに居て下さる…」

どうやら、楽しい夢心地の境にあるようだった。

さらに、死に語り<sup>シ</sup>が続いた。

「……ふわーとしていて、あたたかな空気がね。わたしの全身を包んでくれている。ああ、先生って、やっぱり、やさしい人なんだわ。わたしが考えた通りのやさしい先生に身を預けながら、いい眠りに誘われて、わたし、とてもいい世界にと足を踏み入れてしているようよ…。あの、あのお、せん、せ、あ、か、ねのこと…あん、な人…のこと…」

とても間遠い声になって行った。もう、圭子は両瞼を閉じていた。その静かな寝顔を、しばらく、雅彦は見ていた。うつすらとした笑みが沸いた。そうやって、観察したあと、雅彦は医者らしく、圭子の脈を凶った。

「このままでよし…」

と、意味不明の文句を口にした。圭子が完全に意識を失ったのを確認すると、今度は乱暴に彼は圭子の体を扱った。横穴から運び出し、毛布に包み込むと、ライトバンのトランクに圭子の体を取り込んだ。

人の気配など、どこにもない。

車は静かに発進した。

樹海に沿った道から抜け出し、車は一般路に出た。あとは、猛スピードで一路、車は東京を目指した。毛布にくるまれた圭子はまだ生きているようだった。信号で車を停めた時、息を継ぐのか、不規則な寝息が聞こえた。

まだ、生きている…それでいいのだった。

さらに、彼はアクセルを踏み込んだ。

9

死体は常温五度以下でないと、急速に腐敗が進む。

ドライアイスなどで一時的に腐敗を止めることは出来るが、冷やされた部分の臓器を元の状態に戻すことは難しい。

戸倉井雅彦が調布のわが家に辿り着いたのは、青木ヶ原の樹林を出てから二時間余後のことであった。

この古い洋館は、今は彼以外には住んでいない。



ライトバンは草地の外れにある地下標本室前に停められた。

以前は、祖父の精（くわし）が寝泊りした木造の平屋があったが、今は礎石のコンクリート枠だけが残っていた。

毛布に包まれたままの状態で、八瀨圭子の体は地下室にと持ち込まれた。

白磁性の解剖台が鈍く光っていた。

よく磨かれているので、眩くも見える。微かに、寝息のようなものを漏らしており、八瀨圭子はまだ生きているようだった。

生命の鼓動が今も刻まれている。

戸倉井雅彦は一人の解剖医の眼になった。

まず、八瀨圭子の白い衣装を剥ぎ取った。この時ばかりは、彼も胸のときめきを感じた。何年ぶりのことか、ふと、姉の三千子に対して行った加虐の行為が脳裏を過（よぎ）った。鈍い反応ではあったが、男の一物が頭を擡（もた）げていた。半勃起の状態を示していた。

ブラジャーが胸元を隠し、白いショーツが股間を覆っていた。死に体を真似ているので、もはや、女の体は無防備となっていた。

医科用鋏（スライサー）が彼の右手に握られていた。

初めに、鋭い刃先のスライサーの嘴（くちばし）は、ブラジャーに向けられた。手慣れた手付きで刃先は動き、胸の谷間で動いた。ぷつんと音がした。刃先で、布切れが払われると、もろに、乳房が表われ出た。

双つの乳房は少女のかたちに似ていた。

小さ目の、どこか未成熟な乳房のかたちであった。紅色のほのかな色を保った乳首も、固い蕾（つぼみ）のままだった。

解剖医の冷静さを保持しようとしていたのに、ショーツに刃先を向けた時は、少しばかり手先が震えた。

構わず、スライサーの刃先を進め、腰骨に掛かっていたショーツの端を切った。やはり、布切れは刃先で撥（は）ねた。隠されていたものを視線の先で促えた時、「ふふう、ふうむ…」と、彼は独りごちた。

八瀉圭子の股間部の黒い飾り毛は、きれいに剃り落とされていた。すべすべした陶器のような恥丘が晒け出されている。

「あからさまな性」を拒否した女の心の壁が、そこには刻印されているようにも思えた。

「八瀉圭子か。君はそういう名であった。わたしは、美しいこの体のままで、その女をひとまずは生かし続けることが出来るのだ。このわたしだけの世界で…さあ、わたしなりの美体保存の術に取り掛かろうか。それなりの手順を踏ませてもらう」

そう呟くと、とくとくと、わずかな生命の間を刻んでいる白い肉体に、施術を施した。まず、マッサージ用のストーンオイルを、顔、首、耳、そして手にと擦り込んだ。皮膚をソフトに保つのと、脱水を塞ぐための処置として必要であった。特に、瞼、唇、鼻には、やさしい愛撫を加えるように、丁寧なマッサージを行った。これらの部分は、死の直後から脱水が始

まるのであった。マッサージクリームが塗られた両の手で、やさしく、やさしく、圭子の乳房を揉んだ。ブラジャーで締め付けられた跡が少し残っていた。その痕跡を消すための所作であった。

たつぷりと時間を掛けた。

次に、無毛地帯になった恥丘にも、ぬるぬるとした掌が翻った。

やさしく塗り込む。

投げ出されたままの二本の脚が、わずかに開かれています、股間が望めた。マッサージクリームを落とし込んでから、股間を開かせた。

きつちりと閉じられた股間には、わずかに、一筋の割れ目線が刻まれているだけだった。余計な、肉壁の皮膜は内部に包み込まれていた。

白い貝殻にも似ていた。まさしく、閉ざされたままの貝の形状であった。

その部分にと、ぬるぬるした手指が分け入った。

やはり、丁寧にやさしく揉み込む。未発達の圭子の女性器が揉み出され、少し、嫌らしいかたちも、そこに、露われ出て来た。

だが、どこまでも、この部分は手付かずのまま、処女のかたちが保たれていた。やさしい愛撫の時の間、もの言わぬ女は、その歓びの感覚も知ることなく、ただ、弄ばれるままに、最後の時を過ごしていた。

深い眠りの底で、圭子は自分だけの夢を、今も見ているかに思われた。傍目（はため）には、愛撫に身を委ねている女のようにも見えていた。

妖しく裸体が揺れていた。体表には、ほの赤い血の色が浮いて出た。

次に、命を絶えさせるために、雅彦は処置を施した。

死後の肉体を美しく保つための処方である術であった。

大腿静脈をピックアップするため、大腿部にメスを入れた。

血管取り出し棒（ニードル）で静脈を探り切断した。

切断した血管の両端を特殊な器具で挟み取る。夥（おびただ）しい血が噴き出た。まだ、圭子の肉体は微かに命の灯を灯しているかに思われた。

白い琺瑯（ほうろう）製の解剖台の周りには、溝が掘られていた。その溝に沿って血が流れた。同時に、首筋にある頸動脈にも同じ処置が執られた。血の量が増えた。数分の後、八瀉圭子の体は失血のために生色を失なうて行った。やがてのこと、事切れた。手荒い処置だったが、処女のままの美しさを保つには、この方法しかなかった。

生体に近い人体標本を造るために、彼はこの法を用いた。

死体化粧術（エンバーミング）は、アメリカで発達したもので、現に、

死体保存の法としてアメリカでは実用に付されている術の一つでもあった。

死体硬直が来る前に、徐水器に吸引器（ハイドロ・アスピレーター）を併用して用い、死体内に含まれる血液、尿、消火変化物などを体外に排出する処置を彼は施す作業をした。

血管の隅々までも洗い清め、次には、ポンプを用いて、血管内に消毒液を送り込んだ。

防腐剤の化学溶液、死体に生色を保持させるための特殊な溶液、そして、

溶液を固めるための化学薬品を次々に投入した。

こうした処置をしておく、体内に流し込んだ一種の人工的な血液が効を奏し、手首、足先に至るまで、生き生きとした状態が保てるのだった。

一日目の作業を完了するのに、五時間ほども要した。

何者かに、憑かれたように、雅彦は充実の時間を過ごした。

この夜、戸倉井雅彦は地下室の薄暗がりの中で、すでに、死体になった圭子の裸体に添え寝をした。

まるで、恋人と添い寝をするように、このときばかりは優しく接した。不思議なことだった。

死体になった八瀉圭子が好きになっていた。そつと、死体の唇にキスをした。『おやすみなさい』と、もの言わぬ女に声を掛けた。

次の作業に取り掛かった。

両手で抱え取ると、室内隅にしつらえられたホルマリン槽の溶液の中に運び入れ、腕の中の死体を浮かばせた。溶液が騒ぎ、音が立った。

死体が泳ぎ、ホルマリン槽に沈んだ。

次の思いは、闇の中での光景だったが、雅彦の脳裏には、この時、青木ヶ原の地底湖の様が甦った。

地底湖の透き通った水面下で、楽しそうに遊泳の時を過ごしている八瀉圭子の生きたままの有りし日の姿が、瞼の裏に浮いた。

「しばしの夢を見るがいい。至悦のとき。ほんのわずかの間(ま)のこと

だが、いつときだけ、八瀨圭子なりの夢とやらを見るがいい…それぐらいの時の間は用意してやるよ」

口ぶりは優しかったが、その眼差しは次なる闇を見凝（つ）めていた。直ぐに、夢を共有する気色のようなものは失せて、一人の解剖医の顔にと戻っていた。

数日後、死体硬直を示し始めた死体をホルマリン槽から取り出した。

解剖台に死体を据えた。解剖医としての腕を試される機会を失することなく、雅彦は実務者の顔に戻った。

電気鋸（チェーンソー）が手には握られていた。

スイッチを入れると、「びゅびゅびーん」と大層な音を発した。

品定めをするように、雅彦は闇の中の死体をつぶさに見遣（や）った後、ぴたりと、刃先を一定点に定めた。側面向きに位置を変えると、脳天のあたりに電気鋸（チェーンソー）を当てた。

あくまでも、解剖医としての生き方を貫くための判断に立った上でのこと、彼なりの処置の法が施されて行った。

電気鋸（チェーンソー）を圭子の体に向けた。細心の注意力を払いながら、電気鋸は駆動した。脳天から刃は入り、横状の姿勢の体表面が矢断（しだん）状に切断されて行った。不気味な音が響いた。

仰向けに寝かされた姿勢のまま、横状に真っ二つ、体は矢断された。

仰向けなので、顔と手足、胴体そのものなどは保持されていた。

標本そのものが八瀉圭子であることの視認は可能であった。血の代わりに薬液が血管組織内には注入されていたので、血は嘔き出なかった。

固定液が血の流出を止めていたのだ。

戸倉井雅彦の関心は、まったく別の個所にと向けられた。

矢断された面を両開きにすると、すべての内臓が露呈された。

肺臓、胃臓、肝臓などなど、黄色い臓器類が望めた。

「…もちろん、生まれながらのそのまんまだ」

一度、二度、雅彦は頷いた。その視線は下腹部部分にと向いていた。小さな袋状の子宮体が二つに裂かれていた。挿入孔らしき形状が、その下部に示されていた。仔細に観察した後、雅彦は右手の人差し指を一本、そそりとして挿し入れた。軟部状が保たれているので、指は入った。ただの肉穴でしかなかった。

（そんなもの、なんてことはない…）そんな呟きを漏らした。

到底、快樂の器官、などとは雅彦には思えなかった。

「各臓器とも、二十歳という若さの分、生き生きとしている。それだけで充分じゃないか。いやいや、美体標本としてだ。確固たる状態にあれば、それで事足りることだ。この女の名なんぞもなんの関係もないことだし、あとは、永遠美体、としての価値をどうして保たせるかだけだ。解剖医としての腕が問われるのだ。さあ、完全を期そう」

黙々と作業は続けられた。

透明の臓器用溶液を用い、露呈した内臓部を塗り固めた。いわゆる樹脂包埋（じゅしほうまい）標本作成の手法を用いた。やがて、溶液が固まった。さらに、ホルマリン処理、並びに、内部組織の防腐処理を施した。

妙に、その手付きが執拗だった。まるで、一つ一つの内部組織を愛撫するように、手指は動いた。どの内臓というのでもなかった。

切断された断面のすべてが、戸倉井雅彦の、性の対象物、であるかのようでもあった。ひたすらに、夢中の様を示しで、戸倉井雅彦はこれらの全作業を終えた。

切断状の標本は、一つに合わされた。仰向けに戻された状態で、八瀨圭子の、美体標本、は地下室の一隅に飾られた。

「すべてを、愛されている…そう思えば、ひたすらに、お前は自分の夢を見続けることが出来るだろう。そう、たとえ、わたしが死んでもだ。永遠なる美体であることを願うよ。そうだな。時たまには、わたしが接見してやるさ。その内、欲情するなんてこともあるかも知れないし…はは、そんなことはあり得ない話ってことになるのか。こればかりはな…」

闇中に封印された無言のままの一体の標本は何も答えなかった。標本分類棚の二段目の段に据えられた、美体標本、は、それでも闇の一角をじつと見詰めているかのようでもあった。たった独りの妖しげな夢を見ながら…。

風が舞うのか、外気の様子が伝わって来た。地面を打つのか、風が少し



ばかり、騒いでいるようだった。微かに空気が揺れた。

やっと解放されて、戸倉井雅彦は地下室から出た。いくつもの標本類に混ざって、今日から、美体標本が地下室には一つ加わった。

しゅんと、静まる―外界と連動してのことか、地下室は、その内、元の静けさに戻った。ホルマリン臭が鼻に付く以外は、外界との違いは、それほどはない。闇だけが、ひた増しに深くなった。

もう、真夜中らしかった。

(完)